

ジャンバッティスタ・ヴィーコの

《Verum》と《Factum》について

前之園 幸一郎

はじめに

ジャンバッティスタ・ヴィーコ (Giambattista vico, 1668-1744) は 18 世紀の特異な思想家として知られている。彼は当時支配的であったデカルト哲学の影響のもとにその思想を形成し、のちには反デカルト主義者として合理論を徹底的に批判して『新しい科学』《La scienza nuova》¹⁾をうちたてる。しかし、その思想は不明瞭さと難解な論理のためにふかくかえり見られることもなく放置されてきた。その研究はようやく近年にいたって本格的にはじめられるようになったにすぎない。²⁾

さらに、ヴィーコの多面的でふかい学識とその錯綜した叙述は彼の全体象の理解を困難なものにしており、そのために部分的な解釈にもとづく多様なヴィーコ評価を生みだしている。ファシズム期には全体主義者ヴィーコが、さらにはカトリック思想の代弁者としての、あるいは唯物論者としての、さまざまなヴィーコが恣意的につくりだされるのである。³⁾

彼は人間形成の問題をその理論の根底におき、教育に関する問題提起をおこなっている。まず、主知主義的で形式的な体系を強調する教育に対して、ヴィーコは感覚的、情緒的教育のもつ重要性を主張する。人間の自然的本性にそくした発達をおしすすめねばならないからだという。また、彼はその認識論からカリキュラム論を展開し、学習による具体的認識の成果は、かならず行動に転化されうるだろうとする。そして、確実な認識にともなう知識は「人格を積極

的につくりあげるような知識」(*il sapere come attiva costruzione personale*)⁴⁾でなければならないと考えられている。歴史ならびに民族文化のもつ教育的役割への着目もヴィーコの特質をなしている。彼は、人間形成は具体的な歴史的社会的展開のなかでしかおこなわれまいとの観点に立っている。

さて、ヴィーコの提示している問題はそのまま今日の問題につながる内容と批判とをふくんでいる。しかし本稿のテーマはこれらの問題を直接にとりあげることではない。ヴィーコ思想の出発点となっている「真理は事実と相互環流する」(*verum et factum reciprocantur.*)という命題の意味をたどり、その概略を整理することに本稿のねらいはおかれている。

具体的には、新任者特別図書予算によって本学図書館に収蔵されることになった『ヴィーコ全集』⁵⁾によりながら筆者自身が作成した覚え書を整理したものにすぎない。ヴィーコの全体像に対する展望をきりひろくためのささやかな基礎作業として、『新しい科学』以前のヴィーコの著作をたどりながら『*verum et factum*』をめぐる考察をすすめることとしたい。

I 開講講演における問題提示

ヴィーコは、ナポリ大学修辞学講座教授として新学年度のはじめに講演をおこなっている。ここでは、1699年から1707年にかけておこなわれた六回の講演の論旨をその『自伝』のヴィーコ自身による要約にしたがって見ることにする。

最初の講演は『自分自身を知ることはすべての学問を迅速に習得するためにそれぞれの人にたいして最高の動機となる』『*Suam ipsius cognitionem ad omnem doctrinarum brevi absolvendum maximo cuique esse incitamento.*』と題されていた。それは人間のもつ諸能力を高めていく根本にあるものが自己認識であるとの主張を展開するものである。彼によると神が万物の精神であるように、人間の精神は人間内部の神的部分、すなわち神的存在にあたる。見る、聞く、判断する、結論する、記憶するなどの諸能力は、われわれの一人ひとり

のなかに神として精神が存在することを示すものだ。精神はたんに理性的なものであるばかりでなく、感覚、記憶、空想力などの総合されたものである。このまさに神秘的な力を秘めた自己への認識によってわれわれは真理へむかい、その発見のよろこびにひたることができる、とされる⁷⁾。

この講演では神と人間とが対比的に語られ、ピコ・デルラ・ミランドーラ (Pico della Mirandola, 1463-1494) の『人間の尊厳』《*De dignitate hominis*》) にならって能動的で主体的な存在としての人間が強調されている。

第二回講演は『愚者が自分自身に対する敵である以上に悪意にもえ、敵意にみちたいかなる敵も存在しない』《*Hostem hosti infensioem infestioemque quam stultum sibi esse neminem.*》⁸⁾と題して1700年におこなわれた。すでに前回講演の自己認識の強調は自らを理解できない人間が愚か者 (*stultus*) であることを間接的に示してはいたが、ここではそれが外界との関係でとりあげられる。

彼によれば、この世は神の永遠の法 *una legge eterna Iddio* によって支配され、すべてに調和が与えられている宇宙である。愚者にはこのことが理解できない。そのために彼らはその罰として自己自身に対する戦闘状態へとかりたてられる。この自己疎外にともなう真理追求の放棄が不安、自責、自由喪失などをもたらし、愚者は運命と偶然との支配のもとに奴隸として存在することになる。「もし、ある愚か者が狡猾さのために、好色のために、怠惰のために、あるいはとくに破廉恥のために、別のやり方 (*secus*, すなわち道理にもとる行為) を行なうならば、彼は反逆罪の罪人でもあるかのように自己自身に戦争をししかけることになるであろう」(*Si quis stultus sive per malam malitiam, sive per luxum, sive per ignaviam, sive adeo per impudentiam secus facit, perduellionis reus ipse secum bellum gerito.*)⁹⁾。

ここには、のちに『自然法の原理と目的』を経て『新しい科学』の基本テーマとして展開される普遍法の考えが示されている。

第三回講演 (1701年) は『諸君が見せかけでなく真実の、偽りでなく確実なる教養を身につけることをのぞむなら、あらゆる欺瞞が学問の社会から遠ざけ

られねばならぬ』《*A litteraria societate omnem malam fraudem abesse oportere, si vos vera non simulata, solida non vana eruditione, ornari studeatis.*》¹⁰⁾と題して教養ないしは博識(eruditio)について論じられている。教養とはなにか。人間のみが欲することを為し、意図することを実現し、期待されている義務を果たすことができる。本性の奴隷にすぎないライオンはけっして臆病にはなりえず、野うさぎは勇敢になることはできない。ところが自由の主体である人間はその自由ゆえに偽りの知恵に引きずりこまれる。人間がまさしく人間でありうるために教養はもとめられねばならないと説かれている。

学問研究の意義を社会的観点から論じたのが第四回(1704年)の『学問研究によって榮譽にむすびつく最高の利益を得ようとのぞむ者は、名誉、すなわち公共善のために学ぶべきである』《*Si quis ex litterarum studiis maximas utilitates easque semper cum honestate coniunctas perciper velit, is gloriae sive communi bono erudiatur.*》の講演である。低俗な実利主義や皮相な技術主義に反対して、ヴィーコは学問研究が社会的な責任や社会的幸福を視野におさめておしすすめられなければならないことを説いている。¹¹⁾

第五回講演(1705年)も『国家はもっとも文化が栄えたとき、その軍事的栄光が知れわたり統治力も強力であった』《*Respublicas tum maxime belli gloria inclytas et rerum imperio potentes, quum maxime litteris floruerunt*》と題して文化と社会的発展との関連がとりあげられている。ルネサンス期のヒューマニストによる教養観や古典の人間教養研究(studia humanitatis)が個人としての人間形成の発展をもたらしただけでなく政治的、軍事的優越をも生みだしたように、文化的発展は社会的発展をもたらすというのが、この講演の主旨である。ヴィーコは自己疎外におちいる愚者のアナロジーで文化の欠落した国家について論じる。たとえ平和であれ戦争であれ、国家が文化の尊重と愛好とを欠くならば、その国家は偉大なる栄光に達することはできない。学問研究が発展し、学識ある人びとによって社会的諸制度が文化的手段で確立され維持されないかぎり、自然法にもとづく国家的発展は期待できないとされている。

第四回および第五回の講演は共同体ないしは国家という公共的次元で文化の

問題が論じられている。共同体の存立と発展のための文化および教育の組織という観点のみが、全体的文脈からきりはなして強調されるとき、ファシズムとむすびつく先のヴィーコ理解を生み出すことになったと思われる。

『墮落した人間の本性についての認識が自由学芸の宇宙ならびに諸科学の学ばるべき円環へいざないはげまし、かつそれらを学ぶための正しく、容易で、永続的な秩序を提示し、公開する』《*Corruptae hominum naturae cognitio ad universum ingenuarum artium, scientiarumque absolvendum orbem inorat, incitatque; ac rectum, facilem ac perpetuum in iis perdiscendis ordinem proponit, exponitque.*》が第六回講演（1707年）の論題である。ここでは人間をとりまくさまざまな疎外とその克服のための教育が論じられる。

ヴィーコによると、人間はアダムの犯しを罪のゆえにことば *lingua*、精神 *mente*、心 *cuore* によって相互に切りはなされている。ことばは伝達したいとねがう観念をしばしばうらぎり、人間が他人とむすばれることを不可能にしている。精神は、感覚的なすききらいの多様性に由来する立場の相違によって合意に達することができず、相互にひきさかれる結果をもたらしている。心は、あまりに一般化した悪徳によって自らも墮落してしまい、人間の間に和解を生み出すことができなくなっている。すなわち、人間が人間からひきさかれているのである。これは、ことばも知性も感情も同じであった人間の祖先を神が罰することによって生じた墮落にもとづいている。墮落が反目 *discordie* をもたらしたからである。

この状態から人間を救いだすものは徳 *virtù*、科学 *scienza*、雄弁術 *eloquenza* である。この三者が統合的に人間形成に参与し、教育の目的として追求されるとき、はじめて人間は他人を人間として感じとることができるようになるであろう。人間の知恵の働きを生み出すのがこの三つだからだと言う。すなわち、確信をもって知り、よくわきまえて行動し、傾聴される仕方ですることができるようになるからである。

ついでヴィーコは、人間の発達段階とそれに応ずる学習の内容についても論じている。幼年期の特徴は、貧弱な理性の発達と著しい記憶力の発達にある

と彼は考える。そこでこの記憶力の訓練のために、ことばの学習があてられなければならない。それは人間社会をつくりあげている強力な手段の獲得を意味し、すべての学習の基礎をなすものだからである。

少年期を支配するのは想像力と空想力 *fantasia* である。したがって伝説ならびに史実の両面からの歴史の学習がこの時期の学習の中心にすえられなければならない。理性の発達をうながすためには数学の学習がおこなわれるべきである。しかし、理性の教育も感覚的理解にもとづかねばならない。そのために映像的手段をとおして物質の世界をとりあつかう物理学の学習がまずおこなわれて、その後に数学による抽象の世界が学ばれねばならない。これらの学習のあとに形而上学、神学の学習ががつづくのである。

以上のヴィーコの六回にわたる開講演はすべて人間形成を問題にしている。彼はまず自由の主体としての人間を考えている。そしてそのような人間の教育が社会的、歴史的視野のなかで考えられなければならないことを述べている。

Ⅱ デカルト批判と教育における具体性

『現代の学問研究の方法について』《*De nostri temporis studiorum ratione*》(1708年)は、従来の講演とことなりデカルト的方法の批判とヴィーコの教育論とを展開するものである。彼はまず「われわれと古代人たちとではいずれの学問研究の方法がより正しく、よりすぐれているであろうか。それぞれの長所と短所とを明らかにしながらその比較をおこなうことにしよう¹³⁾」と問題設定をおこなう。そしてそれぞれに学ぶべき長所があることを述べたあとで、今日の学問の方法で問題となるのがデカルト的方法であるとしてその批判に移る。「まず最初に、科学の手段について、今日、われわれはわれわれの学問研究を『批判』からはじめる。『批判』はその第一真理があらゆる誤謬から解放されているだけでなくいかなる誤謬のうたがいさえもないように、精神から第二次的真理や蓋然性が誤謬同様に追放されるよう命じている。それはまったく不都合である。というのは少年期には、できるだけやく常識が形成されなければな

らないからだ。年齢がすすみ実際の生活をおこなうようになってから奇妙で横柄な態度におちいらないうためにである。ついで科学が真実から生まれ誤謬が虚偽から生まれるように、常識は蓋然性から (*a verisimilibus gignitur sensus communis*) 生まれる。なぜならば蓋然性は真実と虚偽との中間に存在するものであるからだ¹⁴⁾。

いうまでもなくヴィーコは『批判』そのものを否定しているわけではない。『批判』だけが強調されることに反対するのである。彼は批判が切りすてしまふ蓋然的なことや理屈では説明のつかない感情的なもののなかにこそ真理が存在し、それが教育的、道徳的形成に重要な意味をもつと考えているのである。すなわち、真理を崇拜するあまり科学性や合理性の名のもとに具体的真理が犠牲となることに反対したのである。「それゆえ、子どもたちに常識が発達させられねばならないにもかかわらず、われわれの批判によって常識が子どもたちのなかで圧殺されることがおそれられねばならない¹⁵⁾」のである。

ここでの常識 *sensus communis* は子どもを具体的経験や認識に導くためにもっとも有効な能力だと考えられており、これとならんで感覚的認識の能力をつよめる空想力 *phantasia* も合理論によって窒息させられてはならないとする。「さいごに、われわれの批評家たちは身体的なさまざまな映像のはるか手前に、あるいはそれとはかかわりなく、あるいはそれとをびこえてその第一真実を提示する。しかもこれらの批評家たちは、まだ未発達な子どもたちにその真理を教えるのである。成人が理性によっているように子どもは空想力に支配されているのであるから、どのようなやり方においても将来の能力のもっとも恵まれた証拠と考えられる空想力が子どものなかで盲目にされるべきではない¹⁶⁾」。

ヴィーコは認識論の問題としてよりもむしろ教育方法の問題として、主知主義的教育や理性を強調する教育が空想力をそこなう危険性をもつことに注目しているのである。ついで記憶力の意義も強調される。そして「たとえ同一のものではないにしても、ほとんど空想力と同じものである記憶は、それ以上の精神的¹⁷⁾能力をもたない子どもたちに集中的に発達させられねばならぬ」とされて

いる。すなわち、ヴィーコは個別的な感覚が一般化され、一段高められたものが空想力や記憶であると考えており、そのために、この二つが教育方法の観点から子どもの知的発達のすぐれた手段となるものだとしているのである。

また、彼は発達と対応する教育的働きかけの必要を説き、つぎのような古代人の例をあげる。古代人たちは子どもの発達がゆがめられやすいものであることをよく知っており、そのことをあらかじめ考慮したうえで幾何学の学習上の位置づけをおこなっていたというのである。すなわち、「古代人たちは、自然が示唆するところにしたがう医者たちにならって、生きいきした映像をつくりだす力なしには正しくは理解されえないこの学科（幾何学）を子どもたちに教えた。それは自然にさからうどのような強制力をもくわえずに、知らぬ間に徐々に年令に応じた能力にしたがって推理することになれさせるためである」¹⁸⁾。それというのも幾何学が「すべての学科のなかで子どもたちの論理にもっともよくなじむものだ」(*Geometria ferme omnibus erat Logica puerorum*) とヴィーコが考えているからである。若干の注釈をくわえるならば、ここでは代数的方法による抽象的なデカルト的数学に対してユークリッド幾何学について述べられているのである。ユークリッド幾何学における証明の過程で、図形は具体的な想像力や記憶の働きによる映像のもとに補助線によってその形がさまざまに展開される。具体的に直観的に思考をおしすすめていくこと¹⁹⁾の教育方法的重要性を、彼は「子どもの論理にそくした」と述べたのである。したがって、『批判』が明晰判明なる認識をもたらすためには、なによりもまず教育の順序が人間の発達の順序にしたがうことによって可能となる記憶力や想像力などの基本的能力の発達をまたねばならないとされたのであった。

さて、デカルトは真理について「その確実不可疑の認識をわれわれの精神が獲得しうると思われるような対象にのみ、携わるべきである」¹⁹⁾との立場を明らかにしている。そして明確に認識されうる対象は自然科学的真理である。ヴィーコは、この点についてその疑問を表明する。デカルトの立場に立つなら、人間の（自然）本性や、その道徳的、市民生活的側面にかかわる問題は偶然と選択との支配する不確実な対象として認識の対象からはずされることになる。

これは、むしろ人間を真理からとおざけることにならないか。人間は、人間について、人間の世界について、人間的真理を認識できないのであろうか。ここに、《*verum et factum reciprocantur*》の命題へと発展をするヴィーコの最初の宣言がなされる。「われわれは幾何学的な事柄を証明する。なぜならわれわれが（人間が幾何学的概念や定理として）それをつくったからだ。もしわれわれが物理的自然を証明できるとするならばわれわれがそれをつくったであろう²⁰⁾」。このさりげないことばの意味は、人間の手によって創られたものだけを、人間は真理として証明できる、ということである。数学的定理は、点、線、単位などの観念によってもともと自然界に存在していなかったものを人間精神の所産として人間がつくりだしたものである。それが人間によってつくられた一つのフィクションであるがゆえに、われわれはそれを証明できる。これに対して自然界を支配している諸原理はどうであろうか。人間の認識と証明には限界がつきまとうであろう。自然は人間によってではなく神によって創造されたものであり、したがって神のみが自然についての科学をもちうるからである。すなわち「唯一の絶対者である神においてのみ事物の真実の形態が存在し、それらにしたがって事物の自然は創られているからである²¹⁾」。

しかし、これは人間の無力さの強調のために言われているのではない。むしろ人間が主体的、意図的につくりだす歴史的、文化的世界の存在を示唆しつつ、普遍法の支配する世界が述べられているのである。ヴィーコは、のちに『普遍法の唯一の原理と目的について』《*De universi juris uno principio et fine uno*》を著わすが、そのなかで「神聖なるおきて、すなわち自然法は不変であり、……それは事物の永遠の秩序である」(*Fas seu Jus naturale immutabile. ...hoc est aeterno rerum ordine.*)と述べながら、同時に「あらゆる社会にとって正義が基礎である」(*Justitia omnis societatis fundamentum.*)として正義の内容は人間の選択にゆだねている²²⁾。

ヴィーコは『現代の学問の方法』によってデカルトの『批判』の検討をおこない、人間にかかわる真理はむしろ蓋然的なものなかにこそ存在するとした。そして教育は理性のみならず具体的経験にもとづく感覚的、身体的理解のもと

におこなわれることを強調した。ここに人間の認識しうる真理が人間によって
つくりだされた真理であることが主張され、人間の主体的な真理の創造の問題
が提示されることとなる。

Ⅲ 人間の認識能力と《*verum et factum*》

『ラテン語の起源からたどられたイタリア人たちの最古の知恵について』《*De antiquissima Italorum Sapientia ex linguae latinae originibus eruenda*》
(1710年)の『第一巻形而上学』《*Liber primus sive Metaphysicus*》において、
ウィーコの認識論は展開される。そしてわれわれのテーマである《*verum et factum*》
が本書の主題をなしている。

まず、人間の認識が能動的、積極的な性格をもつものであることを論じながら
スコラ哲学的認識論の批判がおこなわれる。もともと能力を意味することば
「*facultas* はほとんど *facultas* と言われていたが、それから、のちに *facilitas*
(敏速、容易) となった。これは巧みに行なうのにすばやく、かついつでも用
意ができていることを示すことばである。それゆえに *facilitas* は、その働き
による力が行動に転化されるものである²²⁾」。このような能力観からするとスコ
ラの能力理解は固定的なものと考えられざるをえないとする。

スコラ学者たちは、「感覚や空想力や記憶や知性が精神的諸能力 (*animae facultates*)
だ」として一括した共通の名称を与えるとき、いかにも優雅に
(*eleganter*) 論じているように思える。しかし「色彩や味や音や触覚が事物の
なかにあるのだと彼らが考えるにおよんでは、その優雅さも台なしだ²³⁾」。「なぜ
なら、もしもろもろの感覚が能力であるならば、見ながら色を、味わいながら
味を、聞きながら音を、触れながら熱さ冷たさを、われわれは感じるからであ
²⁴⁾る。」

感覚と同様に想像力の性格が能動的なものであることは経験からわれわれは
よく知っている。われわれの知性についても同様である。「われわれが何事か
を意図するとき、われわれはそれを真実につくりあげるのである²⁵⁾」。

このような人間の諸能力が主体的で能動的なものだとする確信はヴィーコを懐疑論者批判、ならびにデカルト主義者批判へと駆り立てる。まず、懐疑論者に対して「彼らを論破するよりすぐれた方法は事実を真理の基準として提示すること以外にはない²⁶⁾」とする。なぜなら「彼らは事物をその外観において見、その具体的本質はわからないと公言しているからである。それでも彼らは結果は承認する。したがって事物がその原因をもっていることは認めている。ところがそれらの原因を認識することは否定する。なぜなら、それぞれの事物がつくりだされる方法や形を知らないからである²⁷⁾」。

事物を成り立たせている諸要素である原因 *causa* の認識が真理の基準となる、とヴィーコは考える。そして懐疑論者がいかにすべてを疑うとはいえ、「われわれ自身がその要素を構成している真理、われわれ自身のなかにその要素のあるような人間的真理の存在²⁸⁾」は否定することはできないとする。すなわち、人間能力の主体性についての確信の自覚に問題があると懐疑論者を批判する。

また、すでに述べたようにヴィーコは反主知主義的立場からデカルト主義者たちへの批判を展開した。その論点は、議論の余地のない真理として提示される明確な観念が抽象的に凝縮された真理であるということにあった。それは具体性を切りすてることによって明らかになる真理だとして批判されたのである。「今まで論ぜられたことによって、真理の基準と規則そのものが、まさに（為された）事実であると結論できる。それゆえに、われわれの精神の明確にして明瞭なる観念は他の真理の基準でありえないのみならず、精神そのものの基準でもありえない。なぜなら、精神は一面では自らを認識するとはいえ、自分自身をつくりはしない。そして自らをつくらないがゆえに自分自身を認識するための仕方、すなわち方法を知らないからである²⁹⁾」。

われわれの主体的な力や実感をともなう具体的な行為に真理の根拠がもめられる。蓋然的なものや合理論で明確にわりきれないものがしりぞけられるのではなく、まさに人間の行為の結果としての「事実」(*factum*)として真理の基礎におかれるのである。そして『イタリア人最古の知恵』は、その第一章が「真理と事実について」(*De vero et facto*)から書きはじめられている。「ラ

テン人たちの間では、真理 (*verum*) と事実 (*factum*) とは区別しないで共通に使われている。あるいは学校の生徒たちが使っているように、これらのことばは相互に転換される。さらに、ラテン人たちにとっては *intelligere* (認識する) は *perfecte legere* (完全に読む) や *aperte cognoscere* (率直に理解する) と同じである。さらに *cogitare* (考える) ということばはわれわれが普通に使っている *pensare* (思う) や *andar raccogliendo* (理解しながら進む) などにあたるものだった³⁰⁾。

ここでは、真理が、人間の行為によってつくりだされるさまざまな現実と関係があり、そのことを古代人たちが経験的に知っていたことが述べられている。そして真理を抽象的に論じてみても意味のないことであり、むしろ「ことばが観念の信号であると同様に、観念は対象的事物のシンボルであり特質である³¹⁾」ことにこそ注目されねばならぬとヴィーコはしている。また認識することとをめぐって、彼は *legere* (読む) と *intelligere* (認識する) との類似点をつぎのように説明する。「*legere* がことばが構成されている、書かれたものの要素を結び合わせることであるように、*intelligere* は完全な³²⁾かたちで観念が生まれてくる、対象的事物のすべての要素を結び合わせることである³³⁾」。そして *intelligere* が *intus legere* (内部に深く入りこんで読みとる) から発生しているとの言語学的な説明もされている。

さて、認識の問題をおしすすめていくうちに、ヴィーコは人間に可能な認識と神でなければできない認識との存在につきあたる。「ところで、知るということは事物のさまざまな要素を統合することだ。そして考えること (*cogitatio*) は人間の精神に、認識 (*intelligentia*) は神の精神に、固有のものとして属している。神は対象的事物の外的、内的すべての要素を見通しているの、それゆえにそれらを包括し配置する。これに対して人間の精神は制約されている。そして自分ではないすべての他の事物が己を超えたものであるがゆえに、その外面的要素のみしか理解できない。したがって対象的事物について考えることはできるが、それらを認識することはできない。かくて人間は理性の完全な所有者ではなく、その参与者にすぎない³³⁾」。神にとっては「真理は事実そのもので

ある。そこで神において第一の真理が存在する。神が最初の創造者であるから³⁴⁾だ」。

このようにして神的真理 (*verum divinum*) と人間的真理 (*verum humanum*) とが区別される。そして神的真理は、あたかも「彫像のような事物の完全な映像」(*imago rerum solida, tanquam plasma*) であるのに対し、人間的真理は「モノグラム、ないしは絵のような平面的映像」(*monogramma, seu imago plana, tanquam pictura*)³⁵⁾ として語られる。

さて、多くの制約をもち事物をその外面においてしかとらえられない人間の認識能力はついに真理へは到達できないのであろうか。ヴィーコによると、むしろこの欠陥や短所に満ちた人間の精神のゆえに科学が生まれることになった³⁶⁾。しかし、それ自身のなかに世界のすべての要素をつつみこみ、すべてを最初から認識している神的科学 (*scientia divina*) とちがって人間の科学は分析的な性格をもたざるをえなかった。「人間は対象を分割しながら知ろうとつとめる。そこで人間の科学は自然がつくったもろもろの作品のある種の解剖であると言うことができよう」³⁷⁾。すなわち、人間の科学は、生きた人体にしか求めることのできない真理を、すでに生命のない人体の解剖において、肉片を切りさき、断片化された真理として認識するのである。ヴィーコによると、人間的科学がその合理性を追求すればするほど、人間は真理から遠ざけられることになる。

ここで、ふたたびヴィーコは《*verum et factum*》へたちかえる。人間が「行為者」とあるとともに「創造者」であるような世界と方法は存在しないであろうか。それは、人間が主体となり意図的な選択によってつくりあげる人間の歴史の展開に求められる。そして、人間をうらぎらない生きた真理の追求のための「新しい科学」(*la scienza nuova*) が確立されることになるのである。その新しい科学のねらいについてヴィーコは述べる。「はるかいにしへの原始古代を蔽っているあの濃い夜の暗闇のなかには、消えることのない永遠の光が輝いている。それは何人たりとも疑うことのできない真理の光である。即ち、この社会は確実に人間によって造られたものであるから、その原理は我々の人間精神そのものの変化様態のなかに求めることができ、またそうでなくてはな

らないことである³⁰⁾。〔清水純一訳〕

新しい科学は、抽象化や断片化や部分的合理主義を排して、人間がつくりだす現実とそこに成り立つまるごとの真理をめざして誕生したのであった。

さて、ヴィーコの《*verum et factum*》の概略について以上にそのアウトラインをたどってきた。そこで明らかとなった主要な点は人間の主体性の強調とその人間と現実との関係である。所与的に現実があるのでなく、人間がそれをつくり、選択し、変革する。そしてそれを可能とするのが人間形成である。神の摂理としての自然法の存在は、人間を束縛するものでも抑圧するものでもない。人間が主体的であることがまさに自然法にしたがうことだからだ。このようにヴィーコは人間形成を中心にすえながら真理と現実との問題をとりあげている。断片的に分解されることによっておしすすめられる精密化や部分的合理主義に対するヴィーコの批判は、今日の教育状況に対する批判であるようにも思われる。

注

- 1) Giambattista vico (1668-1744) はナポリの貧しい本屋の父親と文盲の母親との間に生まれた。貧困さのなかで勉強をつづけるためにナポリ近郊の *vatolla* の貴族の家庭で 9 年間に家庭教師として過ごす。この間にそこの図書館にあった図書を読みふけりローマ古典ならびにヒューマニストたちの著作の研究に専念したといわれる。そこでの古典的教養の獲得によって 1697 年にはナポリ大学の修辞学講座 (*cattedra di retorica*) の教授の地位につく。そこでは新学年度のはじめに教授が開講記念の講演 (*Orazione inaugurale*) を行なうことが慣例となっており、ヴィーコも 1699 年から 1708 年にかけて 7 回の講演を行なった。とくに第 7 回講演は注目をひき、『現代の学問研究の方法について』〈*De nostri temporis studiorum ratione*〉と題する著作として公にされる。

ついで『自伝』〈*Autobiografia*〉、『ラテン語の起源からたどられたイタリア人たちの最古の知恵について』〈*De antiquissima Italorum sapientia ex linguae latinae originibus eruenda*〉(1710)、『イタリア文学者新聞への返書』〈*Risposta al Giornale dei Letterati d'Italia*〉、『自然法の唯一の原理と目的について』〈*De uno universi iuris principio et fine uno*〉(1720)、『法学の一貫性について』〈*De constantia jurisprudentiae*〉(1721) などが出版された。

1725 年には主著『新しい科学』、正しくは『諸民族の共通の本性をめぐる一つの新しい科学』〈*una scienza Nuova d'intorno alla commune natura delle nazioni*〉が出版される。しかしこれは 1730 年に全面的に改訂され、さらにそれを改訂したものが vico の死去した 1744 年に刊行された。

- 2) vico 研究の発展の歴史と現状については、『私のヴィーコ』(清水幾太郎)、中央公

論社『世界の名著 ヴィーコ 新しい学』(1975年 所収)にくわしい。

- 3) E. De Falco, *Storia degli ideali educativi, — da Omero a Montessori—*, Libreria Editorice Ferrara, 1972, p. 324.
- 4) E. P. Lamanna, *Filosofia e Pedagogia nel loro sviluppo storico*, vol. II. Le Monnier, 1967, p. 222.
- 5) *Opere di Giambattista vico*, ed. Francesco sav. Pomodoro, vol. 1-8, Napoli, Stamperia de' classici latini, 1858.
- 6) 『自伝』(Autobiografia) は、サブタイトルに『自分自身によって執筆されたジャンバッティスタ・ヴィーコの生涯』(*vita di Giambattista vico scritta da se medesimo.*) の標題がつけられ、三人称で書かれている。Opere, vol. I, 所収。
- 7) *Autobiografia*, opere, vol. I, p. 17.
- 8) *Autobiografia*, *ibid.*, p. 17.
- 9) *ibid.*, p. 18.
- 10) *ibid.*, p. 18.
- 11) Maria Ricciardi Ruocco (ed.), *Giambattista vico Il pensiero (passi scelti)*, Nuova italia, 1956, p. 16.
- 12) *Autobiografia*, op. cit., p. 19.
- 13) *Utra Studiorum Ratio rector, meliorque, nostrae, an antiquorum? in quo edisserendo commoda, incommodaque utriusque ad exemplum conferemus:* (De nostri temporis studiorum ratione, Opere, vol. 1. pp. 200-201)
- 14) *Et principio, quod ad Scientiarum attinet instrumenta, a Critica hodie studia inaguramur: quae, quo suum primum verum ab omni, non solum falso, sed falsi quoque suspitione expurget, vera secunda, et verisimilia omnia, aequae ac falsa mente exigi jubet. Incommode quidem: nam adolescentibus quamprimum sensus communis est conformandus, ne in vita agenda aetate firmati in mira erumpant, et insolentia.*
Ut autem scientia a veris oritur, error a falsis; ita a verisimilibus gignitur sensus communis. Verisimilia namque vera inter et falsa sunt quasi media: (De nostri temporis, *ibid.*, p. 205)
- 15) *Itaque cum maxime adolescentibus sensus communis educi deberet, verendum ne iis nostra Critica praefocetur.* (De nostri temporis, *ibid.*, p. 205)
- 16) *Denique nostri Critici ante, extra, supra omnes corporum imagines suum primum elocant verum. Sed id adolescentibus immature atque acerbè praecipunt. Nam ut senectus ratione, ita adolescentia phantasia pollet: neque sane pueris, quae beatissimum futurae indolis specimen semper habita est, excaecari ullo modo oportet.* (De nostri temporis, *ibid.*, pp. 205-206)
- 17) *Et memoriam, quae cum phantasia, nisi eadem, certe pene eadem est, in pueris, qui nulla alia mentis facultate praestant, excoli impense necesse est:* (De nostri temporis, *ibid.*, p. 206)
- 18) *Nam Medicos imitati, qui, quo Natura vergit, incumbunt, scientiam iis, quae sine acri imagines conformandi vi haud recte percipi potest, tradebant; ut nulla vi naturae facta, sed sensim, et placide pro aetatis ingenio consuefierent rationi.* (De nostri, temporis, *ibid.*, p. 206)
- 19) デカルト『精神指導の規則』(野田又夫訳, 岩波文庫, 1980, p. 12.
- 20) *geometrica demonstramus, quia facimus; si physica demonstrare possemus,*

faceremus. (De nostri temporis, op. cit., p. 211)

- 21) *In uno enim Deo Opt. Max. sunt verae rerum formae, quibus earumdem est conformata natura. (De nostri temporis, ibid., p. 211)*
De universi juris uno principio et fine uno, opere, vol. II, p. 34, p. 42.
- 22) *Facultas dicta quasi facultas; unde postea facilitas: quasi sit expedita, seu exprompta faciendi solertia. Igitur ea est facilitas, quae virtus in actum deducitur. (De antiquissima Itarorum sapientia, opere, vol. I, p. 119)*
- 23) *Quare satis eleganter scholae loquuntur, quum sensum, phantasiam, memoriam, intellectum animae facultates dicunt; sed elegantiam inquinant, quum colores, sapes, sonos, tactus in rebus esse opinantur. (De antiquissima Itarorum sapientia, ibid., p. 119)*
- 24) *Nam si sensus facultates sunt, videndo colores, sapes gustando, sonos audiendo, tangendo frigida et calida, rerum facimus. (De antiquissima Itarorum sapientia, ibid., p. 119)*
- 25) *quum quid intelligimus, id verum facimus. (De antiquissima Itarorum sapientia, ibid., p. 120)*
- 26) *Nec ulla sane alia patet via, qua Scepticis re ipsa convelli possit, nisi ut veri criterium sit id ipsum facisse. (De antiquissima Itarorum sapientia, ibid., p. 83)*
- 27) *li enim celebrant illud, res sibi videri; quid autem re ipsa sint, ignorare: effecta faientur, ac proinde ea suas habere causas concedunt; sed causas se scire negant, quia ignorant genera, seu formas, quibus quaeque res fiant. (De antiquissima Itarorum sapientia, ibid., p. 83)*
- 28) *nempe ea vera esse humana, quorum nosmet nobis elementa fingamus, intra nos contineamus. (De antiquissima Itarorum sapientia, ibid., pp. 83-84)*
- 29) *Atque ex his, quae sunt hactenus dissertata, omnino colligere licet, veri criterium ac regulam ipsum esse fecisse: ac proinde nostra clara ac distincta mentis idea, nedum ceterum verorum, sed mentis ipsius criterium esse non possit: quia dum se mens cognoscit non facit, et quia non facit, nescit genus, seu modum, quo se cognoscit. (De antiquissima Itarorum sapientia, ibid., p. 78)*
- 30) *Latinis verum et factum reciprocantur, seu, ut scholarum velus loquitur, convertuntur; atque iisdem idem est intelligere, ac perfecte legere, et aperte cognoscere. Cogitare autem dicebant, quod nos vernacula lingua dicimus pensare et ander raccogliendo. (De antiquissima Itarorum sapientia, ibid., p. 71)*
- 31) *Altrinsecus, uti verba idearum, ita ideae symbola et notae sunt rerum: (De antiquissima Itarorum sapientia, ibid., p. 71)*
- 32) *quare quemadmodum legere ejus est, qui colligit elementa scribendi, ex quibus verba componuntur; ita intelligere sit colligere omnia elementa rei, ex quibus perfectissima exprimitur idea. (De antiquissima Itarorum sapientia, ibid., pp. 71-72)*
- 33) *Scire autem sit rerum elementa componere: unde mentis humanae cogitatio, divinae autem intelligentia sit propria; quod Deus omnia elementa rerum legit, cum extima, tum intima, quia continet et disponit: mens autem humana, quia terminata est, et extra res ceteras omnes, quae ipsa non sunt, rerum*

dumtaxat extrema coactum eat, nunquam omnia colligat, ita ut de rebus cogitare quidem possit, intelligere autem non possit: quare particeps sit rationis, non compos. (De antiquissima Itarorum sapientia, *ibid.*, p. 72)

34) *verum esse ipsum factum; ac proinde in Deo esse primum verum, quia Deus primus Factor;* (De antiquissima Itarorum sapientia, *ibid.*, p. 72)

35) *De antiquissima Itarorum sapientia, ibid., p. 72.*

36) *Cum igitur scientia humana nata sit ex mentis nostrae vicio, nempe summa ejus brevitate.* (De antiquissima Itarorum sapientia, *ibid.*, p. 77)

37) *homo autem studet dividendo ea scire. Itaque scientia humana naturae operum anatome quaedam videtur.* (De antiquissima Itarorum sapientia, *ibid.*, p. 74)

38) *Princij di una Sienza Nuova d'intorno alla comune natura delle nazioni,* Opere vol. V, p. 80.

"Ma in tal densa notte di tenebre, ond'è coverta la prima da noi lontanissima Antichità, apparisce questo lume eterno, che non tramonta, di questa verità, la quale non si può a patto alcuno chiamar in dubbio, che questo Mondo Civile egli certamente è stato fatto dagli uomini: onde se ne possono, perchè se ne debbono, ritrovare i Principj dentro le modificazioni della nostra medesima mente umana."

